

摂食嚥下障害学、臨床神経生理学

教授 古閑 公治
Hiroharu Koga

現在の研究テーマと内容

嚥下障害の客観的評価法として、病院で放射線を用いた嚥下造影検査（VF）が行われています。VFは造影剤を含有した嚥下物（飲食物）が咽頭（口）から食道へ移動する様子、あるいは誤嚥（飲食物が気管に入ってしまう状態）など画像として経時的に記録できる利点があります。しかしながら、放射線を用いるVFが侵襲的な検査のため、短期間での頻繁な測定や透視室などの特別な設備が必要です。そこで、非侵襲的検査法によるヒト嚥下機能の客観的評価の開発を神経生理学のおよびリハビリテーション学的にアプローチして、臨床応用への確立を目指すための研究を行っています。また、看護学的アプローチとして口腔清拭用スポンジブラシを用いた口腔内刺激による口腔機能への効果を調べたりなど、我々は摂食嚥下領域に携わるメディカルスタッフのひらめきも大切にします。皆さんの疑問点を一緒に探究し、好奇心を育みましょう。。

これまでの研究成果と今後の展開

【学術論文】

1. 「Kinectを用いた健常者における非侵襲・非接触型嚥下機能評価法の研究」
竹谷剛生、古閑公治、久保高明、大塚裕一、宮本恵美、船越和美、本木 実
保健科学研究誌, No.14 : 103-113, 2017
2. 「口腔清拭用スポンジブラシの口腔内刺激による口腔機能への効果」
船越和美、古閑公治、久保高明、大塚裕一、宮本恵美
熊本保健科学大学 保健科学研究誌 No.14 : 149-156, 2017
3. 「前頸部への温熱療法や頸部の嚥下体操が嚥下時筋活動に及ぼす影響について」
渡邊有佳、久保高明、伊藤優美、井上雅哉、伊藤将太、古閑公治、宮本恵美、大塚裕一、
船越和美
熊本保健科学大学 保健科学研究誌 No.12 : 65-73, 2015
4. 「摂食・嚥下リハビリテーションチームアプローチの現状について ～熊本県内の言語聴覚士が所属する病院・施設を中心に～」
宮本恵美、大塚裕一、久保高明、古閑公治、船越和美、小園真知子
熊本保健科学大学 保健科学研究誌 No.10 : 43-50, 2013

【学会発表】

2016年度：3題、2015年度：5題、2014年度：4題、2013年度：4題、2012年度：2題

【受託研究】

平成25年10月1日～平成28年3月31日

「咀嚼・嚥下に適したユニバーサルデザインパン（米粉パン・玄米パン）の特性解明」

大学院を目指すみなさんへメッセージ

本研究室の構成メンバーとして、本学の摂食嚥下研究チームが参画しています。チームには、臨床検査技師、理学療法士、言語聴覚士、看護師の各職種から編成されていることで、摂食嚥下領域に関する幅広い研究課題を探究することが可能となります。特に社会人で臨床において常日頃から問題意識を持って取り組んでいらっしゃる方々に対して問題解決への一助となると思います。